

V139b 野辺山宇宙電波観測所の運用：2 科学運用

齋藤正雄、梅本智文、南谷哲宏（国立天文台野辺山）

国立天文台野辺山宇宙電波観測所は開所以来野辺山 45m 望遠鏡（45m 鏡）、ミリ波干渉計によって数多くの成果をあげてきた。そして、野辺山 45m 鏡は運用開始から 30 年以上が経過しつつも、なお、その競争力を維持すべく開発は続けられ、新しい機能の追加、現機能の改良が進行中または計画中である。また、今年度より旧野辺山太陽電波観測所が運用した偏波強度計の運用を引き継いだ。そうした中、野辺山宇宙電波観測所は次の 2-3 年に 45m 鏡がどのような科学要求を満たすべきか、そしてどのような科学運用をすべきかを見直している。本講演ではシリーズの講演の 2 番目のものとして、45m 鏡の科学運用案を紹介する。科学運用を定める理由は 3 つある。1 つめは科学要求にもとづいた運用を実施することである。2 つめは観測所がユーザーへ科学運用のやり方を提示し、スムーズに共同利用を進めることである。3 つめは科学運用計画を実現するためのハードウェアやソフトウェア開発・整備項目を整理し、これに、優先順位をつけて集中投資を行うことができる。科学運用の内容はどのような共同利用サービスが提供できるシナリオなのかにはじまり、ウェブによる情報提供、科学運用ソフトウェア、ヘルプデスク、マニュアルに関してより詳細を決める初の試みである。太陽偏波強度計の運用についてもこの議論の一部になる予定である。春の学会で発表した科学要求と合わせ、本公演で報告する科学運用は野辺山宇宙電波観測所を特徴づけるものである。